「日々の理科」（第 1256 号） 2017（H29）, 12, 14

「晩秋の小石川植物園（４）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

小石川植物園の正門から、上位段丘面（武蔵野台地）に上る道は、この園のメイン・ストリートと言える。東大研究者の自動車も通れる広い舗装道路だが、一気に標高差 17～18 メートルを直登することになる。見た目よりも、勾配は意外にも急で、私はいつもここでイキナリ疲れてしまう。

晩秋の今の時期は、空がよく見えるようになる。この日は最高の快晴だったので、何ともさわやかな気分で歩くことができた。前を歩く老夫婦が、手をとりあって苦労しながらこの坂を登っていた。

坂を登り切ると、武蔵野台地の段丘面に出る。広く平らな土地だ。ここには有名なサクラの林がある。３月下旬～４月上旬には満開の桜の下、多くの入園者で賑わう。今は、サクラの紅葉も落葉もすっかり終わり、人影もまばらで、別の場所を歩いているようだった。

植物園の研究棟を右に折れると、奥に柴田記念館がある。ここでは資料室が公開されているほか、小石川植物園後援会の事務局もある。先日、後援会から連絡があり、工事の為かなりの長期間この記念館は閉鎖されるとのこと、もう一度中を見学させてもらった。

12 月とはいえ、植物園には見どころもある。このイロハモミジの並木もその一つだ。

まさに今が見ごろという感じで、サクラ林の閑散ぶりをよそに、多くの入園者で賑わっていた。